

芦屋大学論叢 第86号

(令和8年7月31日)抜刷

大学におけるダンス教育が社会的スキル発達に与える影響

ー対面授業とリモート授業の比較からー

森 田 玲 子

大学におけるダンス教育が社会的スキル発達に与える影響

ー対面授業とリモート授業の比較からー

森 田 玲 子

芦屋大学経営教育学部客員講師
(大阪体育大学スポーツ科学部)

1. はじめに

2019年12月初旬、中華人民共和国湖北省の武漢市で初めて新型コロナウイルス感染者（COVID-19）が発見され、その後、世界的に感染が拡大し、大きな脅威をもたらした¹⁾。我が国においても、雇用・収入、働き方の変化と家庭生活、日常生活などに影響を与え、2020年4月には緊急事態宣言を受け、人々は3密を避けるとともに、基本的に自宅で過ごすよう要請された。

この時、大学教育では、入構制限や授業形態が変更され、対面授業が遠隔授業（オンラインやオンデマンド）となり、他者との直接的なコミュニケーションが絶たれた。また、スポーツの専門大学であるO大学では、講義授業だけではなく実技授業においても、初回から遠隔授業（オンラインやオンデマンド）を実施し、筆者は、2019年に引き続き「ダンスⅡ」の実技授業を担当した。

文部科学省によると学校体育の表現運動系およびダンスは、小学校では、表現運動系は、自己の心身を解き放して、イメージやリズムの世界に没入してなりきって踊ったり、互いのよさを生かし合って仲間と交流して踊ったりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である²⁾とされている。また、中学校・高等学校では、ダンスは、イメージを捉えた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることを楽しさや喜びを味わうことのできる運動である³⁾⁴⁾と述べられている。よって、表現運動系およびダンス（以下、ダンスとする）は、仲間との交流やコミュニケーションを重視する運動である。そして、円滑な対人関係、組織の活性化を図るために、社会的スキルの獲得が大切である。社会的スキルとは、他者との円滑なコミュニケーションを営み、対人関係を適切に構築、維持する能力⁵⁾であり、他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能⁶⁾のことをいう。

社会的スキルの獲得については、スポーツ活動や体育授業にて社会的スキルにポジティブな影響を与えたと報告されている⁷⁾⁸⁾⁹⁾。また、寺岡（2022）は、体育実技の履修が授業期間前後においてメンタルヘルスの向上、および社会的スキルの維持に寄与し、体育実技への参加が最も影響を与えている要因のひとつである可能性を示している¹⁰⁾。ダンス授業においても、社会的スキルやライフスキルの向上と学校生活への促進もみられたと指摘されている¹¹⁾¹²⁾。また、森田（2021）は、ダンスの持つ特性を生かした授業を、自己評価を高めながら展開することが、社会的スキルの向上に寄与できることが示唆されたと述べている¹³⁾。

先に述べた事柄は、他者と直接的に関わりを持ったことにより得た結果である。対面授業と遠隔授業を比較した研究では、学習効果と心理的影響について、服部ら（2022）は、実技系（Live）、実技系（動画）については遠隔授業では限界があり、対面授業あるいは対面授業と遠隔授業のハイブリッド型に依存せざるを得ないと指摘している¹⁴⁾。伊藤ら（2021）は、大学のスポーツ実技（エアロビックダンス）の授業は、遠隔授業においても対面授業と同様に心理的（気分）に好転的な影響を与えると述べている¹⁵⁾。コミュニケーション・スキルとの関連について、向出（2022）は、オンライン授業はコミュニケーション・スキ

ルの表現力の向上が見られたが、対面授業のように他者受容・関係調整の向上は見られなかったことを明らかにしている¹⁶⁾。また、Galusha, J.M. (1997) は、遠隔授業は人間関係の構築が困難であり、学生は孤独になりやすいという特性があると報告している¹⁷⁾。

本研究では、2019年4月～2020年1月（以下、2019年度）の対面授業と2020年4月～2021年1月（以下、2020年度）のオンライン・制限あり対面授業の社会的スキル獲得に与える影響について比較検討する。

2. 方法

2-1. 調査用紙

社会的スキルは、菊池（2007）が開発した KiSS-18 を使用した¹⁸⁾。KiSS-18 は、18 の設問からなり、5 段階で評価する社会的スキルで、1. 初歩的スキル、2. 高度なスキル、3. 感情処理のスキル、4. 攻撃に代わるスキル、5. ストレスを処理するスキル、6. 計画のスキルと 6 つの下位尺度に分類されている。自己評価は、学習指導要領を参考に設問項目を作成した。設問内容は、1. みんなで踊る楽しさや喜びを味わえた、2. 踊りの特徴と表現の仕方を理解できた、3. イメージを深めた踊りを通して交流や発表ができた、4. 表現などの自己や仲間の課題を発見できた、5. 合理的な解決に向けて取り組み方を工夫できた、6. 自己や仲間が考えたことを他者に伝えることができた、7. ダンスの学習に主体的に取り組めた、8. 互いに協力しながら一人一人の違いに応じた表現や役割を大切に出来た、9. 安全を確保しながらできた、10. 積極的に取り組めた、の 10 項目とした。回答は 5 件法（1. できなかった、2. ややできなかった、3. どちらともいえない、4. ややできた、5. できた）で得た。

2-2. 調査対象と時期および方法

調査は、O 大学体育科教育コース 3 年生の必修通年科目のダンスⅡで実施した。

KiSS-18 は、2019 年 4 月～2020 年 1 月（2019 年度）と 2020 年 4 月～2021 年 1 月（2020 年度）に実施し、前期初め（4 月）、前期終わり（7 月）、後期初め（9 月）、後期終わり（1 月）の計 4 回調査した。自己評価は、毎行われる授業後に実施した。なお、2019 年度は授業時間内に紙媒体を用いて配付・回収を行い、2020 年度は Google Forms を用いて実施した。

2-3. 2020 年度（オンライン授業、制限あり対面授業）の社会的スキルを目指した主な授業プログラム（ダンスⅡの授業内容は資料 1）

2020 年度のダンスⅡの授業では、コロナ禍という状況を踏まえ、2019 年度のダンスⅡのシラバスや授業内容を基に、臨機応変に対応し、授業展開を試みた。

[オンライン授業を実施した際に工夫した点]

第 1 回では、学生がオンライン授業を受講できる環境にあるかを確認するため、Google Forms を用いてアンケート（現在の居場所、情報機器の所有状況、インターネット接続環境、アルバイトの状況など）を実施し、現状を把握した。

第 2 回～第 10 回のオンライン授業では、毎回リアルタイムでダンスを踊り、臨場感を得やすいように工夫した。また、学生同士の心理的距離を縮めるため、音声やチャット機能を積極的に取り入れた。さらに、対面授業が開始される前に学生同士の関係づくりを進めるため、自己紹介の時間を設けた。その際、通信障害を避けるため、自己紹介を行う学生のみが順番にカメラとマイクを ON にし、顔出しが可能な場合は顔

を映すよう伝えた。また、対面授業が開始された際、学生たちが制限ある空間の中で大きく堂々と踊るイメージを持たせるため、プロダンサーたち一人一人が限られた空間の中でコンテンポラリーダンスを踊っている動画を視聴させた。

第11回～第14回の授業では、オンラインで受講している学生たちに対し、対面授業で行った各ステップやダンスのレパトリー動画（①ステップの方法やダンスの振付を行いながら細かく解説しているもの、②一連のステップやダンスを行っているものを正面から撮影し対称で踊ったもの、③一連のステップやダンスを行っているものを後ろ向きから撮影したもの）を、筆者自身がモデルとなり別撮りで撮影し、課題として配信した。

〔制限あり対面授業を実施した際に工夫した点〕

制限あり対面授業では、3密（密閉・密集・密接）を回避するよう心掛け、感染予防を徹底した。具体的には入室前の検温と手指消毒の実施、マスクの常時着用、小まめな換気、授業後の掃除と消毒作業などである。

授業では、体育館の床にマスキングテープで2m×2mの枠を縦6×横10の計60枠作成し、各枠に番号を貼付した（2020年度：制限あり対面授業の使用枠は資料2）。そして、周囲にも同じ60枠をExcelで作成し、事前にGoogle Classroomにて配信した。学生たちには、ダンス室に入室した後、周囲の番号位置へ全ての荷物を置き、指定番号枠で待機するよう指示した。また、毎回の授業では、学生同士がさまざまな仲間と関わられるよう、学生の指定番号を変更した。そして、互いの良さや違いを認め合う姿勢を育むため、学生たちが半分に分かれてダンスを踊り終えた際には、見る側の学生たちは踊る側の学生たちに大きな拍手を送るよう促した。

第11回～第14回の授業では、第2回～第10回のオンライン授業で行った内容を、学生一人一人が指定枠内で踊り、復習した。

第17回～第22回の模擬授業では、W-upの模擬授業グループを3人～4人の12グループとし、学生たちがグループ活動を始める前に、W-upを創作する際の注意事項を伝えた。具体的には、マスクを着用しソーシャルディスタンスを保つこと、仲間同士の接触は行わないこと、「主体的・対話的で深い学び」を意識して取り組むことである。また、W-upの実施においてもマスクの着用を徹底し、仲間同士の接触やフォーメーションは伴わず、指定枠内で行える内容とするよう指示した。さらに、発表時には、模擬授業グループのメンバー全員が必ず生徒役に対して指導するよう伝えた。各グループでは、班長（進行係）、書記（意見などを纏める係）、発表者（模擬授業を発表する際に中心となって展開する係）を決定したうえで、ダンスに必要なW-up（心拍数を上げる全身運動、関節可動域を広げるストレッチ、音楽のリズムに合わせた動きなど）を検討し、創作活動を進めた。第17回～第18回では、W-upの制作と指導案の作成に時間を充て、各グループで模擬授業に用いる5分程度の曲を選定した。模擬授業では、各グループが対象学年（中学1年生～高校3年生）を設定し、導入（集合・整列・出欠確認・挨拶など）、展開（W-upの指導）、まとめ（1曲通し）を含む15分間の授業構成とした。第19回～第22回では、3グループずつ模擬授業を実施し、発表後には振り返りを行い、クラス全体で内容を共有した。

第23回～第30回のグループでの作品創作（創作ダンス）では、新型コロナウイルスの影響で毎年実施していたダンス合同発表会が中止となったため、1クラスを4グループに分け、グループごとに創作ダンス作品を制作し、クラス内発表を行った。創作活動に入る前には、模擬授業（W-up）と同様に、マスクを着用しソーシャルディスタンスを保つこと、仲間同士の接触を行わないこと、「主体的・対話的で深い学び」を意識して取り組むこと、人任せにせず全員で考えることを注意事項として伝えた。また、創作ダンス作品は、接触を伴わず、可能な限り距離を確保した構成にするよう伝えた。その後、各グループの中から、班長、副班長、書記を決定した後、学生主体でテーマなどを設定した。話し合いが停滞したり、助言を求められた時には、学生

自身が課題を解決し決定できるよう、例を示したり選択肢を増やす形で助言することを心掛けた。また、学生たちが創作などを行う際にも基本的には「待つ姿勢」で授業を進め、学生からの質問などには、先述したようなアドバイスを行った。さらに、創作の妨げにならない範囲で励ましの声かけや進行を促す問いかけも行った。発表は、全員がマスクを着用し、1グループずつ実施した。見る側は、3密を避ける形で鑑賞した。発表後はグループごとに振り返りを行い、クラス全体で共有した。また、個別に感想文などを課題として課した。

2-4. 分析

KiSS-18 のデータは、2019 年度と 2020 年度の変化を比較した。自己評価は、設問ごとに平均得点を算出し、年度間で比較した。対象は、2019 年度は、A クラス 48 名、B クラス 47 名であったが、有効回答は、欠損値が無い A クラス男子 36 名・女子 9 名の計 45 名 (93.8%)、B クラス男子 26 名・女子 17 名の計 43 名 (91.5%) の合計 88 名であった。2020 年度は、C クラス 43 名、D クラス 46 名であったが、有効回答は、欠損値が無い C クラス男子 26 名・女子 13 名の計 39 名 (90.7%)、D クラス男子 24 名・女子 11 名の計 35 名 (76.1%) の合計 74 名であった。

2-5. 統計処理

年度間の比較と時系列の変化を検討するために、KiSS-18 は、総得点と 6 つの下位尺度を従属変数とした年度 (2019 年, 2020 年) × 時期 (前期初め, 前期終わり, 後期初め, 後期終わり) の 2 要因分散分析を行った。

自己評価は、年度間で、前期と後期の項目ごとに対応のない t 検定を行った。前期自己評価と後期自己評価の関係については、ピアソンの相関係数を算出した。前期自己評価と前期終わり社会的スキルの関係、後期自己評価と後期終わり社会的スキルの関係、年間自己評価と社会的スキル年間得点差の関係については、回帰分析を行い、相関係数を算出した。統計処理には SPSSver.31 を用い、いずれの検定においても有意水準は 5% とした。

3. 結果

欠損値が無いデータを有効回答とし、得られたデータは、2019 年度は 88 名、2020 年度は 74 名であった。

3-1. KiSS-18 による社会的スキル得点の 2 要因分散分析 (年度 × 時期)

表 1 は KiSS-18 による社会的スキル得点の 2 要因分散分析 (年度 × 時期) の結果を示したものである。いずれの項目においても、通年授業における測定時期では主効果は認められたが、年度による主効果は認められなかった。初歩的スキルでは、球面性の仮定が満たされなかったため、Huynh-Feldt の修正を行った。その結果、測定時期に有意な主効果が認められた ($F(2.919, 306.408) = 11.512, p < .001$)。また、多重比較検定の結果、前期初めと前期終わり ($p < .05$)、前期初めと後期終わり ($p < .001$)、後期初めと後期終わり ($p < .01$)、で有意差が認められた。高度なスキルでは、測定時期に有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、前期初めと前期終わり ($p < .01$)、前期初めと後期終わり ($p < .01$) で有意差が認められた。感情処理のスキルでは、測定時期に有意な主効果が認められ、前期初め < 前期終わり ($p < .001$)、前期初め < 後期終わり ($p < .001$)、後期初め < 前期終わり ($p < .05$)、後期初め < 後期終わり ($p < .001$) で有意差が認められた。攻撃に代わるスキルでは、測定時期についても有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、前期初め < 前期終わり ($p < .001$)、前期初め < 後期終わり ($p < .001$)、後期初め < 前期終わり ($p < .05$)、後期

初め＜後期終わり ($p<.001$) で有意差が認められた。ストレスを処理するスキルでは、球面性の仮定が満たされなかったため、Huynh-Feldt の修正を行った。その結果、測定時期に有意な主効果が認められた ($F(2.914, 496.332)=7.429, p<.001$)。また、多重比較検定の結果、前期初め＜前期終わり ($p<.05$)、前期初め＜後期初め ($p<.05$)、前期初め＜後期終わり ($p<.001$) で有意差が認められた。計画のスキルでは、球面性の仮定が満たされなかったため、Huynh-Feldt の修正を行った。その結果、測定時期に有意な主効果が認められた ($F(2.859, 457.422)=17.965, p<.001$)。また、多重比較検定の結果、前期初め＜前期終わり ($p<.001$)、前期初め＜後期初め ($p<.05$)、前期初め＜後期終わり ($p<.001$)、後期初め＜前期終わり ($p<.05$)、後期初め＜後期終わり ($p<.01$) で有意差が認められた。総合得点では、球面性の仮定が満たされなかったため、Huynh-Feldt の修正を行った。その結果、測定時期に有意な主効果が認められた ($F(2.769, 831.134)=26.640, p<.001$)。また、多重比較検定の結果、前期初め＜前期終わり ($p<.001$)、前期初め＜後期初め ($p<.01$)、前期初め＜後期終わり ($p<.001$)、後期初め＜前期終わり ($p<.05$)、後期初め＜後期終わり ($p<.001$) で有意差が認められた。

表1 KiSS-18 による社会的スキル得点の2 要因分散分析(年度×時期)

項目	年度	時期				主効果		多重比較
		前期初め	前期終わり	後期初め	後期終わり	年度	時期	
初歩的スキル	対面	10.3	10.7	10.6	11.4	0.068	11.512***	前期初め＜前期終わり*, 前期初め＜後期終わり***, 後期初め＜後期終わり**
	2019年度	(2.5)	(2.6)	(2.6)	(2.3)			
	オンライン・制限あり対面	10.3	10.8	10.6	10.9			
	2020年度	(2.5)	(2.6)	(2.5)	(2.5)			
高度なスキル	対面	11.0	11.3	11.2	11.4	0.720	7.023***	前期初め＜前期終わり**, 前期初め＜後期終わり**
	2019年度	(1.6)	(1.8)	(1.6)	(1.8)			
	オンライン・制限あり対面	11.1	11.7	11.2	11.6			
	2020年度	(1.6)	(1.6)	(1.8)	(2.2)			
感情処理のスキル	対面	10.4	10.9	10.5	11.4	1.073	16.733***	前期初め＜前期終わり***, 前期初め＜後期終わり***, 後期初め＜前期終わり*, 後期初め＜後期終わり***
	2019年度	(1.7)	(1.9)	(1.5)	(1.8)			
	オンライン・制限あり対面	10.4	11.5	11.0	11.4			
	2020年度	(1.9)	(2.1)	(1.9)	(2.1)			
攻撃に代わるスキル	対面	10.3	10.8	10.6	11.4	3.658	20.786***	前期初め＜前期終わり***, 前期初め＜後期終わり***, 後期初め＜前期終わり*, 後期初め＜後期終わり***
	2019年度	(2.0)	(1.9)	(1.6)	(2.1)			
	オンライン・制限あり対面	10.7	11.6	10.9	11.7			
	2020年度	(1.9)	(1.8)	(2.1)	(1.9)			
ストレスを処理するスキル	対面	10.4	10.8	10.8	11.4	1.506	7.429***	前期初め＜前期終わり*, 前期初め＜後期初め*, 前期初め＜後期終わり***
	2019年度	(1.6)	(1.8)	(1.8)	(2.2)			
	オンライン・制限あり対面	10.7	11.3	11.2	11.3			
	2020年度	(1.9)	(2.0)	(1.7)	(2.1)			
計画のスキル	対面	10.8	11.4	11.3	11.9	0.537	17.965***	前期初め＜前期終わり***, 前期初め＜後期初め*, 前期初め＜後期終わり***, 後期初め＜前期終わり*, 後期初め＜後期終わり**
	2019年度	(1.8)	(2.0)	(1.9)	(2.0)			
	オンライン・制限あり対面	11.0	11.9	11.3	11.9			
	2020年度	(2.0)	(1.8)	(2.0)	(2.0)			
総合得点	対面	63.2	65.9	65.0	69.0	0.991	26.640***	前期初め＜前期終わり***, 前期初め＜後期初め**, 前期初め＜後期終わり***, 後期初め＜前期終わり*, 後期初め＜後期終わり***
	2019年度	(8.2)	(9.8)	(8.2)	(9.8)			
	オンライン・制限あり対面	64.2	68.7	66.2	68.8			
	2020年度	(8.3)	(9.6)	(9.6)	(10.9)			

上段：平均値，下段：(標準偏差)

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, いずれの項目も相互作用なし

3-2. 自己評価

表2の自己評価は、2019年度と2020年度の前期得点、後期得点、通年平均得点の平均値と標準偏差および2019年度と2020年度間の比較について示したものである。

2019年度は、前期総合得点 42.8 ± 5.2 、後期総合得点 42.7 ± 5.7 、通年平均総合得点 42.8 ± 4.3 であった。2020年度は、前期総合得点 41.3 ± 4.3 、後期総合得点 45.6 ± 4.1 、通年平均総合得点 43.4 ± 3.8 であった。また、2020年度では、前期授業よりも後期授業の方が高かった。前期授業では、「1. みんなで踊る楽しさや喜びを味わえた」「3. イメージを深めた踊りを通して交流や発表ができた」「5. 合理的な解決に向けて取り組み方を工夫できた」「6. 自己や仲間が考えたことを他者に伝えることができた」「8. 互いに協力しながら一人一人の違いに応じた表現や役割を大切にできた」「9. 安全を確保しながらできた」の6項目に有意差が認められた。そのうち、「9. 安全を確保しながらできた」のみ2020年度の得点が高かった。一方、その他5項目では、2019年度の方が高かった。後期授業では、すべての項目において有意差を認め、2019年度よりも2020年度の方が高かった。

通年授業を通して比較すると、「7. ダンスの学習に自主的に取り組めた」「9. 安全を確保しながらできた」「10. 積極的に取り組めた」の3項目において有意差が認められ、いずれも2019年度より2020年度の方が高かった。

表2 2019年度と2020年度のダンス授業前期および後期の自己評価の変化

自己評価	前期			後期			通年平均		
	2019年度 (n=88)	2020年度 (n=74)	比較	2019年度 (n=88)	2020年度 (n=74)	比較	2019年度 (n=88)	2020年度 (n=74)	比較
1	4.4 (0.5)	4.2 (0.5)	$p < .01$	4.3 (0.6)	4.5 (0.5)	$p < .01$	4.4 (0.5)	4.3 (0.5)	$n.s.$
2	4.2 (0.6)	4.2 (0.5)	$n.s.$	4.2 (0.7)	4.5 (0.4)	$p < .01$	4.2 (0.6)	4.3 (0.4)	$n.s.$
3	4.2 (0.6)	3.9 (0.5)	$p < .001$	4.2 (0.6)	4.5 (0.5)	$p < .01$	4.2 (0.6)	4.2 (0.4)	$n.s.$
4	4.1 (0.6)	4.0 (0.5)	$n.s.$	4.2 (0.6)	4.5 (0.5)	$p < .001$	4.1 (0.6)	4.2 (0.4)	$n.s.$
5	4.1 (0.6)	3.9 (0.5)	$p < .05$	4.2 (0.6)	4.5 (0.5)	$p < .01$	4.1 (0.6)	4.2 (0.4)	$n.s.$
6	4.2 (0.6)	3.6 (0.7)	$p < .001$	4.3 (0.6)	4.5 (0.5)	$p < .01$	4.2 (0.6)	4.1 (0.5)	$n.s.$
7	4.3 (0.6)	4.4 (0.5)	$n.s.$	4.3 (0.6)	4.6 (0.5)	$p < .001$	4.3 (0.5)	4.5 (0.4)	$p < .05$
8	4.3 (0.6)	4.0 (0.6)	$p < .001$	4.3 (0.6)	4.6 (0.5)	$p < .001$	4.3 (0.6)	4.3 (0.4)	$n.s.$
9	4.4 (0.5)	4.6 (0.5)	$p < .01$	4.4 (0.5)	4.7 (0.4)	$p < .001$	4.4 (0.5)	4.7 (0.4)	$p < .001$
10	4.5 (0.5)	4.6 (0.5)	$n.s.$	4.4 (0.6)	4.6 (0.5)	$p < .01$	4.5 (0.5)	4.6 (0.4)	$p < .05$
総合得点	42.8 (5.2)	41.3 (4.3)	$n.s.$	42.7 (5.7)	45.6 (4.1)	$p < .001$	42.8 (4.3)	43.4 (3.8)	$n.s.$

上段：平均値，下段：（標準偏差）

3-3. 社会的スキルと自己評価

図1-1～2は、前期自己評価得点を独立変数、後期自己評価得点を従属変数とする相関関係を示したものである。2019年度： $r = .803$ ($p < .001$)，2020年度： $r = .603$ ($p < .001$)であった。自己評価の前期後期の社会的スキルの間には、2019年度と2020年度ともに、0.1%水準の強い正の相関関係が認められた。

図 2-1～2 は、前期自己評価得点を独立変数、前期終わり社会的スキル得点を従属変数とする相関関係を示したものである。2019 年度： $r = .442$ ($p < .001$)，2020 年度： $r = .288$ ($p < .05$)であった。前期自己評価と前期終わりの社会的スキルの間には、2019 年度と 2020 年度ともに、2019 年度は 0.1%水準の強い正の相関関係，2020 年度は 5%水準の正の相関関係が認められた。

図 3-1～2 は、後期自己評価得点を独立変数、後期終わり社会的スキル得点を従属変数とする相関関係を示したものである。2019 年度： $r = .360$ ($p < .001$)，2020 年度： $r = .525$ ($p < .001$)であった。後期自己評価と後期終わりの社会的スキルの間には、2019 年度と 2020 年度ともに、0.1%水準の強い正の相関関係が認められた。

図 4-1～2 は、通年自己評価を独立変数、社会的スキルの年間得点差(後期終わり－前期初め)を従属変数とする相関関係を示したものである。2019 年度： $r = .132$ ($n.s.$)，2020 年度： $r = .185$ ($n.s.$)であった。2019 年度と 2020 年度ともに、自己評価と社会的スキル年間得点差には相関関係は認められなかった。

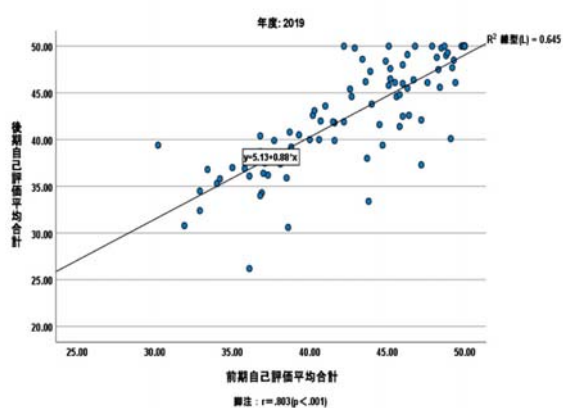


図 1-1 自己評価の前期後期の関係(2019 年度)

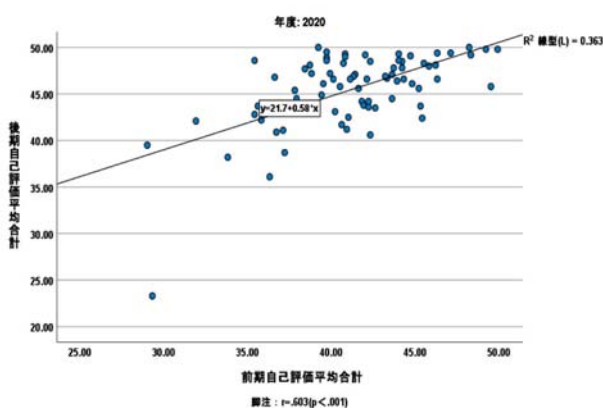


図 1-2 自己評価の前期後期の関係(2020 年度)

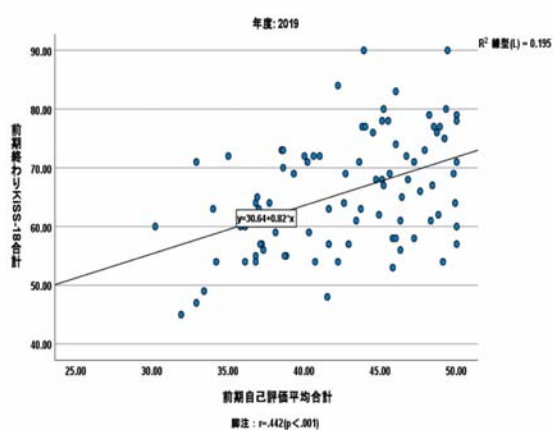


図 2-1 前期自己評価と前期終わり社会的スキルの関係(2019 年度)

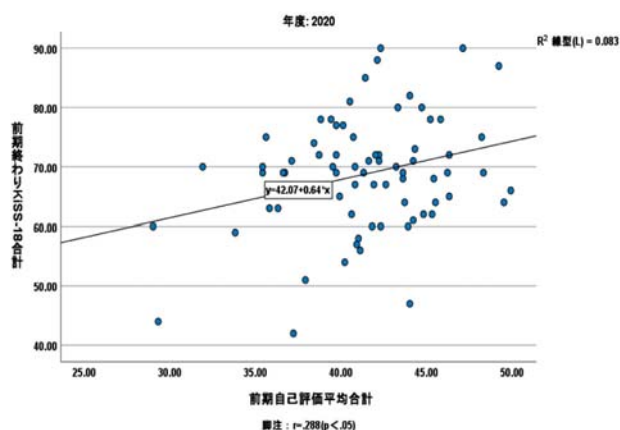


図 2-2 前期自己評価と前期終わり社会的スキルの関係(2020 年度)

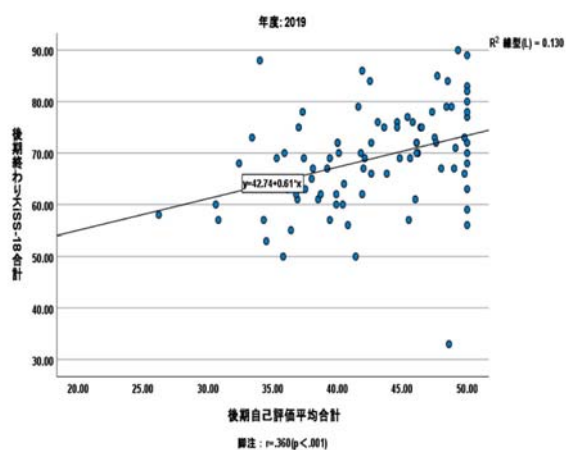


図 3-1 後期自己評価と後期終わり社会的スキルの関係(2019 年度)

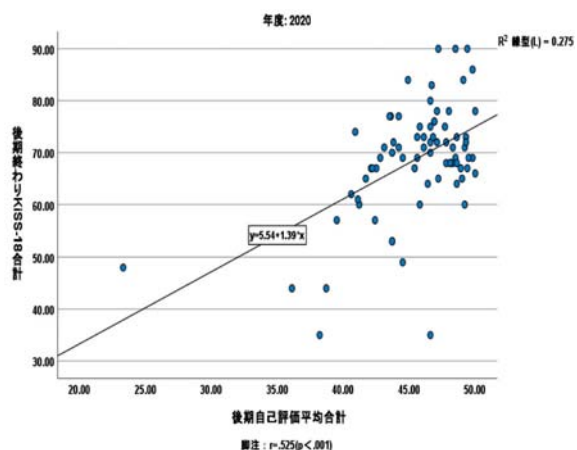


図 3-2 後期自己評価と後期終わり社会的スキルの関係(2020 年度)

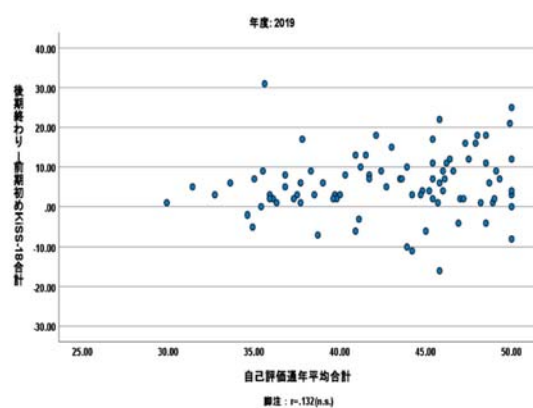


図 4-1 年間自己評価と社会的スキル年間得点差の関係(2019 年度)

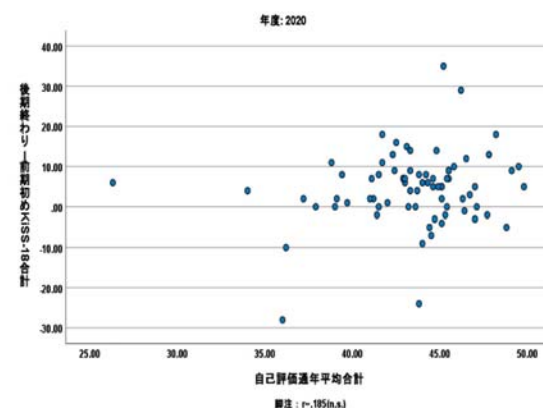


図 4-2 年間自己評価と社会的スキル年間得点差の関係(2020 年度)

4. 考察

4-1. 社会的スキル

ダンスⅡ受講者の前期初めの社会的スキル得点は、2019年度 63.2 ± 8.2 、2020年度 64.2 ± 8.3 で、菊池(2007)の大学生の平均得点 56.40 ± 9.64 と比較すると高かった¹⁹⁾。O大学の学生は、小学生期や中学生期からスポーツに取り組んできた者が多く、スポーツ活動を通してコミュニケーション能力や社会的ルールを身につけている。また、大学進学後も体育系クラブやサークルへの加入率が高い。東川ら(2018)は、部活動加入経験や役職経験の有無などとライフスキルとの関係を考察したところ、部活動への加入経験に加え、役職経験やレギュラー経験がある部員は、経験のない者に比べ高いライフスキルを保有していたと述べている²⁰⁾。

2019年度の対面授業と2020年度のオンライン・制限あり対面授業を比較した結果、年度による主効果は、いずれの社会的スキル因子においても認められなかった。この要因は、2020年度のオンライン・制限あり対面授業において、2019年度の対面授業の内容を可能な限り実施できるよう工夫したことが挙げられる。また、毎回の授業終わりに学生たちが提出する“振り返り・感想レポート”や“質問・リクエスト”に寄せられた意見を踏まえ、例えば、「みんなの顔が見られず寂しい」「はやく、みんなに会いたい」といったコメントを受けて、次回以降の授業では、1人ずつカメラとマイクをONにし、毎回数名ずつ自己紹介を行うなど、学生たちの要望を反映した配慮を行ったことも影響したと考えられる。また、学生たちは、これまでに経験のない危機的状況の中で、どのように学びを継続するかを模索しながら、一体感をもって授業に取り組んでいたと推察される。そして、2020年度の制限あり対面授業では、実際に受講生と対面し、様々な制限がある中でともにダンスを行ったことで、互いの心理的距離が縮まり、結果として2019年度の対面授業と大きく変わらない水準に至ったと考えられる。

測定時期の多重比較では、前期初めと前期終わり、前期初めと後期終わりのいずれの比較においても、初歩的スキル、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキル、および総合得点の全てにおいて0.1%~5%水準の有意差が認められ、平均得点は上昇していた。

前期授業では、2019年度の対面授業と2020年度のオンライン・制限あり対面授業のいずれにおいても、学校体育のダンス(創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンス)に関する講義および実技を行った。2019年度の対面授業では、少人数グループで、現代的なリズムのダンスの創作と発表を行い、さらにグループメンバーを入れ替えてフォークダンスの模擬授業用の学習指導案を作成し、役割分担を行い発表した。模擬授業終了後は、生徒役の学生が感想を記入し、その後、グループ内で話し合いを行い、感想を纏めた。そして、発表グループには、生徒役のグループの感想を印刷・配付し共有した。また、毎回の授業終了時には、ダンス記録用紙に授業内容や気づき、自己評価を記録し、思考を促した。これらのグループでの創作活動や指導案作成の過程が、あらゆる社会的スキルの向上に寄与したと考えられる。

2020年度のオンライン・制限あり対面授業では、第10回までオンライン形式で行い、自己紹介、ウォーミングアップ・ステップと感想、前回の振り返り・フィードバック・質問・リクエストを加えて、各単元の授業を展開した。第11回から対面授業が開始された際には、学生たちが限られた空間の中での動きをイメージできるよう、プロのコンテンポラリーダンサーたちが緩急強弱を表現しながら身体を大きく動かす様子や、ダンス講義で学んだデフォルメなどの要素を取り入れて踊る動画を鑑賞した。そのうえで、ダンサーの身体表現の特徴や所属カンパニーについて解説し、学生たちが「自分たちもこのように表現できる」という具体的なイメージを持てるよう促しながら、対面授業におけるスペースの使い方や実施方法を説明した。また、

対面時で踊るレパートリーのダンスをオンライン授業で指導し、学生がいつでも復習できるよう、筆者が解説付き教材動画を作成し、各授業クラスの Google Classroom に掲載した。また、第 11 回～第 15 回授業では、ハイレックスの形式で実施されたが、ほとんどの学生が対面で受講していた。2019 年度では、現代的なリズムのダンスのテストを行ったが、2020 年度では、オンライン授業で学んだダンスを指定された枠内で踊る形式で実施した。また、ダンス記録用紙は感染症対策の観点から、オンライン授業に引き続き Google Forms で提出させた。なお、前期授業ではフォークダンスの模擬授業は行わず、W-up の模擬授業は 2019 年度と同様に後期授業に実施した。学生たちはマスクを着用し、3 密を避けながら授業を受講していた。また、ハイレックスに切り替わった際には、対面で受講した学生たちから緊張や喜び、楽しさといった感情が伝わってきた。これらの制限下においても、学生同士が体育館で接触を避けながら関わったことで、社会的スキルの向上につながったと考えられる。後期授業では、2019 年度の対面授業と 2020 年度のオンライン・制限あり対面授業のいずれにおいても、前期とは異なり学生主体で W-up の模擬授業を行い、創作ダンス作品の制作と発表に多くの時間を費やした。創作過程では、作品テーマやシーンを決定し、振付の試行錯誤、音楽や衣装の選定などを、対話と協働を通して進めた。2019 年度の対面授業では、2～4 年生の約 10 クラスが参加するダンス合同発表会に向けて、各クラスが 1 つの創作ダンス作品を制作し、発表会当日には約 300 名の学生がクラスごとに交代で作品を披露した。クラス全員が協力して作品を構成し、完成度を高める取り組みが展開された。一方、2020 年度の制限あり対面授業では、前期に実施できなかった模擬授業を補完しつつ、感染症対策を講じながら 1 クラスを 4 グループに分けて創作ダンス作品を制作した。学生たちは限られた環境の中でも互いに協力し合いながら作品の構成と発表に取り組み、完成した作品はクラス内で発表した。両年度ともに、W-up の模擬授業ではお互いの意見を傾聴し真剣に取り組み、創作ダンス作品では仲間同士が協力し作品の完成度を高めようとしていた。模擬授業では「計画」「実施」「評価」を繰り返す過程を通して学習が深化し、創作ダンス作品の発表後に得られた達成感や自己肯定感を高め、社会的スキルの向上を促す一因となったと考えられる。さらに、模擬授業やダンス発表における協働的な取り組みは、仲間との密接な関わりや試行錯誤を生み、ラポールの形成や信頼関係の構築を促進し、結果としてコミュニケーション能力が高まり、対人関係スキルが向上したと推察される。

前期初めと後期初めでは、計画のスキルおよび総合得点に 1%～5% 水準の有意差が認められ、いずれも平均得点が上昇していた。この要因の一つとして、前期授業において学生が問題点を見つけ、その対策を検討し、解決を繰り返した経験が、社会的スキルの向上を促した可能性があると考えられる。

後期初めと後期終わりでは、初歩的スキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキル、および総合得点において 0.1%～5% 水準の有意差が認められ、いずれの平均得点も上昇していた。これは、前期と後期の授業内容の違いが影響を与えた可能性があると考えられる。前期授業では教員が授業を主導したのに対し、後期授業では学生が主体となり、仲間と協力しながら模擬授業の展開や創作ダンス作品の制作に取り組んだ。そのため、仲間同士で質問し合う、互いを高め合う、助け合う、感情を表現し共有するなどの場面が増え、これらの協働的な活動が社会的スキルの向上に寄与したと考えられる。

前期終わりよりも後期初めの方が、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキル、および総合得点において 5% 水準の有意差が認められ、いずれの得点も低下していた。夏休み期間中は学生の生活環境が大きく変化するため、その変化が他者との関わり方に影響を及ぼし、結果として社会的スキルの得点低下につながった可能性があると考えられる。

4-2. 自己評価

2019 年度と 2020 年度を比較する。前期授業では、2019 年度の方が 2020 年度よりも 5 項目で有意差が認められ高かった。これらの項目が高かった要因として、2019 年度は授業開始時から対面形式で実施され、早い段階から仲間同士が関わり、コミュニケーションをとる機会が多く、相互理解が深まりやすい環境であったことが考えられる。また、2019 年度の前期対面授業では、少人数グループで現代的なリズムのダンス創作および発表、さらにフォークダンスの模擬授業を行った。これらの活動では、アイデアやイメージを形にして他者に伝え、構想や計画を立て、実践を通して試行錯誤しながら修正・洗練させていく過程が求められた。このような協働的な学習過程を通して相互理解や信頼関係が形成され、その結果、ダンス創作や模擬授業の発表時には大きな達成感と安心感が得られ、自己評価の平均得点が高くなったと推察される。

2020 年度の前期授業で「9. 安全を確保しながらできた」の得点が高かったのは、当時はコロナ禍であり、授業の約 3 分の 2 がオンライン、残りの 3 分の 1 が対面（ハイフレックス）で実施されたためであろう。学生一人一人が感染対策に十分に注意し、3 密を避けながら授業を受講していたことが影響したと考えられる。

2019 年度と 2020 年度の前期授業において積極的に取り組む姿勢がみられたのは、両年度とも受講しているコースに、将来保健体育科教員を目指す学生が比較的多く、授業に対する意識が高かったことが関係していると考えられる。

後期授業では、2019 年度より 2020 年度の方が、全ての項目において 0.1%～5%水準で有意差が認められ高かった。前期授業では、オンライン授業が全体の約 3 分の 2 を占め、その後の対面（ハイフレックス）授業においても制限された枠内で踊る活動が中心であったため、他者との直接的な関わりは限定的であった。一方、後期授業では、感染予防対策を講じながらも、枠内にとどまらない活動が可能となり、学生主体で模擬授業やダンス創作に取り組んだ。これらの活動を通して仲間同士が関わり合い、コミュニケーションを交わし、相互理解を深めながら協働できたことが、自己評価得点の向上に寄与したと考えられる。

4-3. 社会的スキルと自己評価の関係

前期自己評価得点と後期自己評価得点の関係では、2019 年度と 2020 年度のいずれにおいても正の相関関係が認められた。両年度ともに、前期の自己評価が高い学生は後期の自己評価も高い傾向にあり、2019 年度より 2020 年度の得点の方が高かった。前期自己評価平均合計と前期終わり KiSS-18 合計の関係では、2019 年度と 2020 年度のいずれにおいても正の相関関係が認められた。後期自己評価平均合計と後期終わり KiSS-18 合計の関係では、2019 年度と 2020 年度のいずれにおいても正の相関関係が認められた。後期終わり一前期初め KiSS-18 合計と自己評価通年平均合計の関係では、2019 年度と 2020 年度のいずれにおいても、有意差は認められなかった。

社会的スキルでは、測定時期による比較ではすべての社会的スキルに有意差が認められたが、年度間の比較では有意差は認められなかった。自己評価については、2019 年度では前期・後期ともに大きな変化は見られなかったのに対し、2020 年度では前期より後期の得点が高かった。2020 年度の自己評価が前期より後期が高得点になったのは、オンライン授業から制限のある対面授業になり、他者とのかかわりの中でモチベーションが向上したことも一要因と考えられる。

5. まとめ

本研究は、O 大学におけるダンス授業の教育的効果を、対人関係能力の一側面である社会的スキルに着目して検討した。2019 年度の対面授業と 2020 年度のオンライン・制限あり対面授業と異なる授業形態のもとで、社会的スキル向上を意図した模擬授業やダンス創作をグループやクラス（2019 年度、2020 年度）単位で実施し、社会的スキルと自己評価の関係を年度ごとに比較検討することを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

社会的スキルは、前期初め、前期終わり、後期初め、後期終わりの計 4 回調査した。通年授業における測定時期では主効果は認められたが、年度による主効果は認められなかった。測定時期では、6 つの下位尺度および総合得点で有意な主効果が認められた。測定時期の多重比較では、前期初めと前期終わりの間には 6 つの下位尺度および総合得点、前期初めと後期初めの間には 2 つの下位尺度および総合得点、前期初めと後期終わりの間には 6 つの下位尺度および総合得点、後期初めと前期終わりの間には 3 つの下位尺度および総合得点、後期初めと後期終わりの間には 4 つの下位尺度および総合得点で認められた。

自己評価では、後期授業において、2019 年度の対面授業より 2020 年度のオンライン・制限あり対面授業の方が、全ての項目において 0.1%～5%水準で有意差が認められ、得点が高かった。また、2019 年度は前期得点と後期得点にほとんど差がなかったのに対し、2020 年度は前期よりも後期得点が高くなっていた。

相関関係では、前期自己評価得点と後期自己評価得点の間には、両年度とも正の相関関係が認められ、前期の自己評価が高い学生は後期の自己評価も高い傾向にあり、2019 年度より 2020 年度の得点の方が高かった。前期自己評価平均合計と前期終わり KiSS-18 合計の関係では、2019 年度と 2020 年度のいずれにおいても正の相関関係が認められた。後期自己評価平均合計と後期終わり KiSS-18 合計の関係では、2019 年度と 2020 年度のいずれにおいても正の相関関係が認められた。後期終わりー前期初め KiSS-18 合計と自己評価通年平均合計の関係では、2019 年度と 2020 年度ともに、有意差は認められなかった。

社会的スキル得点は、両年度においても菊池（2007）の大学生の平均得点よりも高く²¹⁾、両年度ともに前期初めと後期終わりを比較すると得点は有意に向上していた。前期終わりと夏休みを挟んだ後期初めの社会的スキルを比較すると、初歩的スキル、高度なスキル、ストレスを処理するスキルに有意差は認めなかったが、前期終わりより後期初めの感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキル、総合得点は有意に低下していた。

このことから、ダンス授業における社会的スキルの発達には、授業形態よりも学習環境が大きく影響することが示唆された。特に、オンライン・制限あり対面授業では他者との直接的な関わりが制限される一方、対面での協働的な活動が可能となる後期授業では、学生同士のコミュニケーションや相互理解が促進され、社会的スキルや自己評価の向上につながる事が明らかになった。したがって、ダンス教育においては、他者との協働や対話を伴う学習機会を確保することが、社会的スキルの発達に重要であると考えられる。

資料1 ダンスⅡ 授業内容

学期	回	2019年度（対面授業）	授業形態		2020年度（オンライン授業、制限あり対面授業）
			2019年度	2020年度	
前期授業	第1回	オリエンテーション	オンライン	オンライン	オリエンテーション
	第2回	現代的なリズムのダンスの指導法 ①リズムに乗る(884422111)			学校体育におけるダンス授業について ①創作ダンス
	第3回	現代的なリズムのダンスの指導法 ②友達と関わって動く、空間の工夫			学校体育におけるダンス授業について ②フォークダンス
	第4回	リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作①)			学校体育におけるダンス授業について ③現代的なリズムのダンス
	第5回	リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作②)・ミニ発表①			即興的な表現
	第6回	リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作③)・ミニ発表②			動きを工夫して変化をつける
	第7回	リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作④)・全体発表			デフォルメを使って創作・表現する
	第8回	創作ダンス：デフォルメ			ものを使つての表現 一ひと流れの動きー
	第9回	創作ダンス：ものを使つての表現 一ひと流れの動きー			オノマトペを使って動きの質感を表す
	第10回	創作ダンス：日常の動きからダンスへ			今までのダンスの振付を覚える
	第11回	模擬授業：フォークダンスの指導案作成	対面／ オンライン (ハイフレックス)	対面	オンライン授業の復習 part1
	第12回	模擬授業：フォークダンスの指導案作成と発表練習			現代的なリズムのダンス：ワタリドリを踊ろう！、オンライン授業の復習 part2
	第13回	模擬授業：フォークダンスの指導案発表(グループ発表①)			創作ダンス：グレイテスト・ショーマンを踊ろう！、オンライン授業の復習 part3
	第14回	模擬授業：フォークダンスの指導案発表(グループ発表②)			フォークダンス：南中ソーランを踊ろう！、オンライン授業の復習 part4
	第15回	模擬授業：フォークダンスの指導案発表(グループ発表③)、まとめ			まとめ、課題提出
後期授業	第16回	オリエンテーション、ダンス合同発表会について話し合う	対面	対面	オリエンテーション
	第17回	模擬授業：W-upの創作、ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動①)			模擬授業：W-upの創作
	第18回	模擬授業：W-upの創作と発表練習、グループで作品創作(創作活動②)			模擬授業：W-upの創作と発表練習
	第19回	模擬授業：W-up(グループ発表①)、グループで作品創作(創作活動③)			模擬授業：W-up(グループ発表①)
	第20回	模擬授業：W-up(グループ発表②)、グループで作品創作(創作活動④)			模擬授業：W-up(グループ発表②)
	第21回	模擬授業：W-up(グループ発表③)、グループで作品創作(創作活動⑤)			模擬授業：W-up(グループ発表③)
	第22回	模擬授業：W-up(グループ発表④)、グループで作品創作(創作活動⑥)			模擬授業：W-up(グループ発表④)
	第23回	模擬授業：W-up(グループ発表⑤)、グループで作品創作(創作活動⑦)			グループで作品創作(創作活動①)
	第24回	模擬授業：W-up(グループ発表⑥)、グループで作品創作(創作活動⑧)			グループで作品創作(創作活動②)
	第25回	グループで創作した作品を一つの作品に統合、ダンス合同発表会に向けて踊り込み			グループで作品創作(創作活動③)
	第26回	ダンス合同発表会の創作作品の踊り込み、最終確認			グループで作品創作(創作活動④)
	第27回	模擬授業：W-up(グループ発表⑦)、ダンス合同発表会の振り返り			グループで作品創作(創作活動⑤)
	第28回	模擬授業：W-up(グループ発表⑧)、現代的なリズムのダンス			グループで作品創作(創作活動⑥)
	第29回	模擬授業：W-up(グループ発表⑨)、現代的なリズムのダンス			グループで作品創作(創作活動⑦) 踊り込み、最終確認
	第30回	補講(第26回と第27回の間にあったダンス合同発表会の振り替え)			創作ダンス作品発表、まとめ

資料2 2020年度：制限あり対面授業の使用枠



引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：第1章 新型コロナウイルス感染症が国民生活に与えた影響と対応，2021.
- 2) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 体育編，2017.
- 3) 文部科学省：保健体育編 体育編，高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説，2018.
- 4) 文部科学省：保健体育編 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説，2017.
- 5) 大坊 郁夫：社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き，電子情報通信学会技術研究報告，HCS，ヒューマンコミュニケーション基礎，第106巻，第219号，pp.31-36，2006.
- 6) 相川 充：人づきあいの技術ー社会的スキルの心理学ー，サイエンス社，2000.
- 7) 西田 順一，橋本 公雄，徳永 幹雄，柳 敏晴：組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果，野外教育研究5-2，pp.45-54，2002.
- 8) 中澤 史，麓 正樹，谷木 龍男，山崎 将幸：スキー実習による受講生の社会的スキル向上効果，法政大学スポーツ研究センター紀要，第32巻，pp.9-13，2014.
- 9) 木内 敦詞：健康づくりと友だちづくりを行う体育授業プログラム．竹中晃二編，運動と健康の心理学．朝倉書店，pp.110-112，2012.
- 10) 寺岡 英晋，村山 光義，佐々木 玲子，稲見 崇孝，東原 綾子，野口 和行，加藤 幸司，永田 直也，福士 徳文：新型コロナウイルス感染症拡大下における大学生のメンタルヘルスと社会的スキルに関する調査研究：対面授業による体育実技の履修有無の比較から，大学体育スポーツ学研究，2022.
- 11) 山本 浩二，中井 聖：高等学校におけるダンス授業の効果の検討，近畿医療福祉大学紀要，Vol.13(2) pp.49-56，2012.
- 12) 高山 昌子：ライフスキル獲得を目指した授業実践：創作レクリエーションダンスを通しての学生の変化，太成学院大学紀要，第16巻，pp.73-77，2014.
- 13) 森田 玲子：保健体育科教員を目指す学生の社会的スキルに関する研究ーダンス授業の取り組みを通してー，芦屋大学論叢，第74号，2021.
- 14) 服部 辰広，松田 康宏，伊藤 譲，久保山 和彦：対面授業と比較した遠隔授業の学習効果に関する研究ー保健医療学部整復医療学科学生に対するアンケート調査よりー，日本体育大学紀要，2022.
- 15) 伊藤 理香，林田 はるみ，諏訪部 和也：大学のスポーツ実技（エアロビックダンス）における対面授業及び遠隔授業の心理的效果，東海学園大学教育研究紀要，2021.
- 16) 向出 章子：同時双方向型オンラインによるダンスの授業ーコミュニケーションに着目してー，舞踊学，第45号，2022.
- 17) Galusha, J.M. “Barriers to Learning in Distance Education”. Interpersonal Computing and Technology Journal, 5(3):6-14. 1997.
- 18) 菊池 章夫編（著）：社会的スキルを測る，KiSS-18 ハンドブック，川島書店，2007.
- 19) 同上
- 20) 東川 安雄，房野 真也，河野 喬，森木 吾郎，前田 一篤：部活動が高校生のライフスキル獲得に及ぼす影響，Vol.1,1-14，人間健康学研究，2018.
- 21) 前掲，菊池 章夫編（著）：社会的スキルを測る，KiSS-18 ハンドブック，川島書店，2007.